



法律文化社 5,670円(税込)

日本の中央—地方関係 —現代型集権体制の起源と福祉国家

市川喜崇(大学法学部教授)著

ここ20年ほどのあいだ、日本では、「分権改革」が話題となり続けている。2000年の分権改革やその後の三位一体の財政改革など、断続的に改革が続けられてきている。

一定の分権改革が実現し、なおもその必要性が唱え続けられているということとは、現在の日本はどうかの意味で集権的であるということである。それでは、現在進行中の地方分権改革が変革の対象としている日本の集権体制は、いつ、いかなる要因で成り立ったのであろうか。

二つの理解が未整理のまま混在しているのが現状である。ひ

とつは、「明治以来の集権体制」という認識である。もうひとつは、現代日本においても他の先進諸国と同様に福祉国家型の中央—地方関係が成立しているという認識である。もし仮に、福祉国家型の中央—地方関係が成立しているとするれば、日本の集権体制が「明治以来」そのままのこの時点で福祉国家に適合的な集権体制へ変容しているはずである。

本書は、日本の行政学が長らく放置してきた上記の理論的混在状況を、長く通説であった「集権体制温存説」に代わる「集権体制変容説」を打ち出すことよって整理し、この新たな歴史理解に基づいて、現代日本の中央—地方関係を包括的に再解釈することを意図するものである。過度に単純化された従来の温存説を棄却し、変容説に基づいた確かな中央—地方関係の認識を得ることは、今後の分権改革の制度設計に対しても大いに資することになるはずである。

日本公共政策学会2013年度著作賞受賞 著者より



同文館出版 2,940円(税込)

ランドマーク商品の研究 ⑤ —商品史からのメッセージ

石川健次郎(大学名誉教授)編著
川満直樹(大学商学部准教授)他著

本書は、同志社大学人文科学研究所第5研究会が、これまで研究成果として刊行してきた石川健次郎編著『ランドマーク商品の研究①②③④』(同文館出版)の続編である。

日本社会が高度経済成長期を境に大きく変化してきたことはよく知られているが、なかでも日本人のライフスタイルが劇的に変化し、この時期に現代日本人の価値観やライフスタイルを決定づける変容の多くが始まった。価値観やライフスタイルはいったい何によって変化させられたのであろうか。本書ではその答えを商品の登場あるいは商品の

普及との関連で考察している。時代の移り変わりや変化を考察し、その因果関係を説明・説明することが歴史研究の課題であるならば、社会を変化させ価値観やライフスタイルに影響を与えた商品に注目する意味は決して小さくない。ただ経済史や経営史の分野では、主に商品供給者側の視点からの歴史分析が主流であった。本書では、それらのことを踏まえ供給者側の実態解明のみに視点を限るのではなく、商品の受け手である生活者の生活がどのように変わり、そして社会がどのように変化したのかという視点からも考察を行っている。特に、本書では高度経済成長期に出現し、我々の生活を大きく変えた商品(新幹線、カラーテレビ、金融用端末機器、スーパーマーケットなど)を取り上げ、個々に分析を行った。われわれが日常当然のように使用している商品が価値観やライフスタイルの変化にどのような影響を与えているのか、本書がそのことを考えるきっかけになれば幸いである。

川満直樹



中公新書 798円(税込)

夫婦格差社会 —二極化する結婚のかたち

橘木俊詔(大学経済学部特別准教授)著
迫田さやか(センターフェロスタディ研究員)著

本書の関心は、我が国の格差のうち、夫婦間の格差に注目することにある。一昔前であれば夫の所得が低ければ、妻が働く場合が多く、逆に夫の所得が高ければ妻は専業主婦が多かった。結婚は家計所得格差を小さくする役割を持っていたのである。

しかし、現在では結婚後も妻が働くのは一般的になり、夫の所得が増えても妻の就業率は下がっておらず、妻の就業が家計所得格差を広げる可能性を高くしている。本書の焦点は結婚した

夫婦だけでなく、結婚したいが結婚できない人、結婚しても離婚してしまう人にも着目し、様々な角度から結婚にまつわる格差について論じている。だが、結婚することだけでなく、結婚しないこと、離婚することなどの結婚に関する行動はあくまで本人同士の自由意思で決まっているので、まわりが結婚のかたちを論じることはできない。

しかし、自由な婚姻行動の結果だからといって、夫婦関係に格差が生じていることは見過ごしてはならないだろう。人は長い歴史の中で、結婚を通して人間関係を築いて精神的な安定や社会的な地位を築いてきた。従来形成されてきた結婚のかたちが変われば我々の生活や社会の安定性はどうかであるのか、この問いに答えるべく、今後とも研究を続けていきたいと考えている。

迫田さやか



成文堂 3,675円(税込)

スポーツビジネスの法と文化 —アメリカと日本

川井圭司(大学政策学部教授)著
グレンM. ウォン著

アメリカのスポーツビジネスは日本のそれと大きく異なる。なぜこの違いが生まれるのか? その答えを探るべく、契約、事故、薬物、労使紛争などのスポーツを巡るテーマを取り上げ、法的な視点から日米それぞれの論点を整理したのが、本書である。

数年前、筆者はアメリカに留学する機会を得たのであるが、その際、本書の共著者で、現在米スポーツ法学会会長を務めら

れているGlenn M. Wong教授との共同研究に従事する好機に恵まれた。日米の論点について議論を重ねていくうちに、これまで見えていなかった文化的相違や、価値観の相違、また司法判断の奥にある哲学のようなものが、感じられるようになった。留学当初、筆者は、アメリカのスポーツ法は先進的であると信じて疑わなかった。しかし、様々な角度から議論を掘り下げると、そもそもその立脚点に違いがあることが明らかになっていった。その良し悪しは別として、それぞれの特徴を明らかにすることで、それぞれの長短もまた明らかになる。背景を知れば知るほど、「そうだったのか!」、ではこれは? という知的好奇心がわいてくる。その一端を讀者に感じていただければ、これに勝る喜びはない。

川井圭司



成文堂 7,350円(税込)

相殺の構造と機能

深谷 格 (大学司法法研究科教授) 著

現在、民法の抜本的な改正作業が進行中である。2013年2月には民法改正中間試案が公表された。本書は、この改正の対象の一つでもある相殺という制度を、歴史的に考察し、またフランス民法との比較において検討する研究書である。では、相殺とは何か。AがBに自動車を百万円で売り、Bに代金を請求した。このとき、たまたまBがAに対して五十万円貸していたとする。BがAの請求に対して貸金との相殺を主張すると、Aは残額の五十万円しか受け取ることができない。これが相殺

である。当たり前のことのようにだが、これに第三者が絡むとやや複雑になる。AがB銀行に定期預金をしていたとする。他方、B銀行もAにお金を貸し付けていた。Aが税金を滞納したので、国が税金を取り立てるためにAの銀行預金を差し押さえてB銀行に預金の払戻を請求した。このとき、B銀行はAに貸した金との相殺を主張することができるか。ここに国対銀行の紛争が生じる。かつて、この問題をめぐって民法学界や銀行実務界において活発な論争が展開され、最高裁判決も二転三転した。しかし、当時は相殺という制度の歴史的・比較法的考察はほとんどなされていなかった。本書において、筆者はローマ帝国時代の相殺制度、中世から近世・近代を経て現代に至るまでのフランスにおける相殺制度を考察し、現代の日本における相殺に関する法律問題の解決策を提案しようとして試みている。

著者より



晃洋書房 3,570円(税込)

アーモスト大学と同志社大学の関係史

同志社大学人文科学研究所編

本書は人文科学研究所での9年にわたる同志社大学とアーモスト大学の交流に関する共同研究成果として上梓された。その内の幾つかは、既に人文科学研究所の紀要である『キリスト教社会問題研究』に掲載されている。本書は10章からなっており、第1章「アーモスト館50年の歩み」では、同志社大学とアーモスト大学を結ぶ絆として建設されたアーモスト館の歴史が描かれている。第2章「1954-1958年のアーモスト大学における日本人留学生」では、戦後間もない頃のアメリカ留学を知る上で、貴重な体験が描かれ

ている。第4章「シンポジウム『アーモストから私が学んだもの』」と第5章「アーモスト大学留学回想記」を合わせて読むことによって、アメリカ留学と両大学の関係の歴史的な変容が明らかになる。第3章「リベラル・アーモストの理念と現実」は新島襄の建学の精神から現在の同志社を考えるヒントを与えてくれる。第6章「アリス・S. ケーリ博士に聞く」は、戦後の同志社とアーモストの関係を再構築したO. ケーリの足跡を知る上で、興味深い証言が綴られている。第7章「同志社におけるアーモスト大学代表の仕事」と第8章「現在のアーモスト大学との交流」では、同志社大学とアーモスト大学を結びつけている組織と今後の課題を提示している。第9章の文献紹介と第10章の両大学の交流史年表は、今後の研究を進展させるための基礎的な作業である。同志社大学とアーモスト大学の関係を知る上で、本書は格好の書物といえよう。

沖田行司(大学社会学部教授)



思文閣出版 3,150円(税込)

人生の歩み 業績録

レスター・ゲスタエ | 同志社・留学・ローマ・ボンベイ | 浅香 正 (大学名誉教授) 著

浅香正同志社大学名誉教授は昨年(2012年)88歳の米寿をめでたく迎えられた。先生の、現在に至るまでの人生(教育・研究活動)の歩みを集大成された著書がこの1冊である。

言うまでもなく、先生の専門領域はローマ史であり、特に「ローマ都市の起源と王政」をめぐる極めて専門的な論文、また都市ボンベイについての長年におたる研究成果等々がこの著書に取められている。しかし、『人生の歩み 業績録』レスター・ゲスタエ」が示す通り、記述は富山の小・中学校時代の回想から始ま

る。京都大学を卒業後、同志社高校を経て同志社大学教員となり、ハーバード大学への留学後、文化史学専攻の中核教員として、研究のみならず教育(特に同志社教育)全般に活躍をされた先生の歩み、その骨格が明確に著わされている。

思い返せば、私自身は先生がアメリカ留学後の1970年代に教育を受けた一人である。その文化史学概論は歴史への関心を深める第一歩であった。また在外研究中の先生ご夫妻をイタリヤ・ローマに訪ね、多くの遺跡を確認する機会を得たことは、自分自身の研究の出発点ともなった。

先生ご自身があとがきに述べられているように、「1人の大学教師は一方において教育、他方において研究という両面の課題と責務を担っている」。その姿勢を日々教えられた一人として、先生に心よりの感謝を申し上げるとともに、今後とも更に、教育と研究の道を追求されることを期待して止まない。

太田信幸(元女子中学校・高等学校校長)



萌書房 2,730円(税込)

維新革命社会と徳富蘇峰

伊藤 彌彦 (大学名誉教授) 著

「八重の桜」ブームの陰で忘れられた観があるが、今年には徳富蘇峰生誕150年に当たる。同志社の歴史を振り返るならば、こちらも、いや、こちらの方がそもそもと重視されるべきテーマではないだろうか。

戦後書かれた徳富蘇峰論をひもとくと、同志社外部の人の記述は、ほとんど新島襄を無視してきた。他方、同志社人の徳富蘇峰論は新島襄の脇役として蘇峰を扱うことが多かった。本書では、学校事業家の視点から新島襄と徳富蘇峰の2人、年齢差

が20歳の2人の間に新日本づくりで濃厚な共鳴関係がみられたこと、新島の死後も蘇峰が同志社に深い思い入れを持ちつづけた理由を探っている。

同志社を中退して熊本に帰った徳富蘇峰の行動について、これまでの通説では、「民権運動活動家」とされてきたが、本書ではむしろ「大江義塾」を開いた学校起業家であったとみなし、さらに上京し「国民の友」を刊行した出版起業家とみなした。政治活動よりも教育事業を介しての維新社会の改良に使命感を抱いていたと論じてみた。そのときの理解者であり精神的協力者として恩師新島襄がいた。

第2部は同志社大学設立の旨意策定の舞台裏、徳富蘇峰著『新日本之青年』との強い関連性などに言及。第3部の同志社史研究余滴では、蘇峰の新書簡の紹介などをおこなっている。読みやすい文章に心掛けて執筆した。

著者より



成文堂
1,995円(税込)

我が人生、学問そして同志社

大谷 實 (おおやみのり) 著
大谷 實 (学校法人同志社総長) 著

著者は、学校法人同志社総長であり、我が国を代表する刑事法学者である。この度、喜寿を迎えられたのを機に、これまでご自身の人生行路の歩み、生き方、学問を振り返るとともに、現職の総長として、同志社が目指すべき方向を示されたのが本書である。

これまでも著者は、「明日への挑戦」、「続・明日への挑戦」を著され、生き方の指針や同志社の進むべき道を示されてきた。著者が総長に就任されて以降、中・高等学校の統合、小学校・国際学院の開設、大学の新学部設置などの改革が行われてきた



角川学芸出版
1,785円(税込)

「暁」の謎を解く

平安人の時間表現

小林賢章 (こばやしけんすけ) 著
小林賢章 (文化学部教授) 著

研究とはオリジナリティであることが要求されます。この本はオリジナリティもオリジナリティ、はや主張して20年にもなるでしょうか。今は大方の人が賛意を示してくるまでになりましたが、発表した当初はひどいものでした。日本語学会では、京大のK先生から、「何を言っているのかさっぱりわからん」と言われましたし、大阪大学のH先生からは「論文不採用」の手紙を受け取りました。全くの逆風でした。

この本に対して、恩師の島津忠夫先生は「君の言っている事は、前著『アカツキの研究』の段階で、正しいと思っていた。今度、自分の『百人一首』を改訂

が、本書においても、その経緯や目的が明確に述べられている。しかし、何と言っても本書の最大の特徴は、著者の人生行路が詳しく語られていることであろう。幼少の頃から現在に至るまでの来し方をたどり、その時々での対処について述べられているのは、まさに「人生の道しるべ」であり、読者は、同志社教育の使命とされる「良心に従って生きる自治・自立の人間を目指す」ことの大切さを心から納得できるものと思われる。次に、研究活動についての部分も、著者は現在でも教科書の改訂を続けておられるので、最新の情報が盛り込まれており、読みごたえのあるものになっている。さらに、同志社総長として、これまで取り組んで来られた「融和と協調」に基づく「二貫教育体制の確立」の重要性についても余すことなく語られている。総長先生のファンの方は勿論のこと、それ以外の方々にも広くお勧めしたい一冊である。

川本哲郎 (かわもとてつろう) 著
川本哲郎 (大学法学部教授)

する機会があれば、君の説をわけてもらいたい」とのありがたいお手紙を頂いた。このギャップが20年の時間差である。過日、『京都新聞』に本書を紹介して、「この解釈を使うと古典の解釈が変わるらしい」と述べておられた。うん、私の主張の中心は、古典では、動詞「明く」は夜が明けた意味ではない。日付が変わる意味(午前3時・真つ暗)だという点にあった。平安時代、男は女の家を「明けて」離れた。その時間帯が、真つ暗か・薄暮か。そこに出ている月は「看明の月」と言うが、暗い空に出ている方がいいか、薄暮の空に出ている方がいいか。などなど、平安時代の恋のイメージは大きく変わります。もちろん前提として、平安時代の恋は別れを表現されることが多かったことはあります。なぜか? 別れの時間こそ恋をしみじみと味わう時間帯だったからです。今の若者達の恋とはその点が大いに違います。

著者より



教文館
3,990円(税込)

徳富蘇峰と師友たち

「神戸バンド」と「熊本バンド」

本井康博 (のべいやすひろ) 著
本井康博 (元大学神学部教授) 著

ラーネッドは、同志社には新島襄と米国伝道会社と熊本バンドという三つの源流があると指摘している(同「回想録」)。実際、同志社英学校の第一回の卒業生15名は全員が熊本バンドの学生たちだった。このことから従来、同志社の初期の学生については、熊本バンドの学生だけに焦点が当てられていた。

しかし、本書では、同志社開校時の8名とされる学生のうちの6名が、J・D・デイヴィスに従って入洛した神戸からの入学生だったことに注目して、彼らを熊本バンドに対する対立項

もしくは並列項と位置づけて「神戸バンド」と命名する。さらに、両バンドの学生達と交流していた徳富猪一郎を学生グループの結節点と位置づける。そのような分析ツールを用いることにより、本書は初期同志社の学生群像をはじめ総合的に描くことに成功している。

本書における「神戸バンド」について、筆者は、緩やかな意味での「バンド」であり、便宜的な呼称である、と述べるが(本書34頁)、その一方で、「熊本バンド」と「花岡山バンド」を峻別した上で、「熊本バンド」の分析にも力を注ぎ、それが決して一体ではなかったことも示している。さらには、名著『熊本バンド研究』で欠けていた個々のメンバーの足跡をも詳細に明らかにしている。

本書は初期同志社の学生や熊本バンド、そして彼らの新島観を知るために必読の書である。大越哲仁(公益財団法人蘇峰会理事)



アスコム
1,260円(税込)

2時間でよくわかる新島八重

吉海直人 (よしうみなおひと) 著
吉海直人 (文化学部教授) 著

新島八重に関しては、昨年4月に早々と『新島八重 愛と闘いの生涯』(角川選書)を上梓した。それに続いて本年4月には写真集『新島八重 山本寛馬 新島襄の幕末・明治中経出版』も出版することができた。本書は私にとつて3冊目の八重本ということになる。前著が資料集を兼ねた研究書に近いスタイルだったのに対し、本書はタイトルに「2時間でよくわかる」とあるように、一般向けの体裁・内容になっている。

そのため構成もいろいろ工夫されており、最初に「八重のこ

とば」として、インタビュー形式で八重の回想談からの抜粋が置かれている。続いてプロフィールとして、「八重の生き方から学ぶ10のポイント」などが並んでいる。核となる伝記部分は、第1章 ならぬことはならぬ、第2章 幕末のジャンヌ・ダルク、第3章 ハンサム・ウーマン、第4章 日本のナイチンゲールの4章仕立てになっている。それぞれが細かな見出しで短くまとめられており、気楽に読んでもらえるような気配りが施されている。

本書の長所は、単にわかりやすいだけではない。他の八重本より遅れて出た分、本書にしか紹介されていない新出資料(イザベラ・バードの引用、徳富蘇峰宛書簡など)も少なくない。これによって従来の本より八重の人生がさらに充実したものとなっている。もちろん小説ではなく、あくまで伝記として書いているので安心して読んでいただきたい。

著者より



アイリス・プレス
1,300円(税込)

ハブルに魅せられた人たちのために

—現代英米詩への誘い—

リンドレー・ウィリアムズ・ハブル(林秋石)^{オーストリア}(元大学文学部教授)著

尾崎寛^{おしきだ}(女子大学名誉教授)訳・編著

1953年、ハブルという名のアメリカ人が来日し、翌年、本学英文学科の教授となり、1993年、林秋石という名の日本人として93年の天寿を全うした。名物教員には事欠かぬ英文学科だが、ハブル先生ほど学生を奮い立たせた人物はいない。なにしろ彼は、前衛芸術が咲き乱れるパリのアメリカ人ガートルード・スタインと親交を結び、現代文学の成立現場で鍛え上げられた本物の詩人だったのである。敗戦の虚脱感の中、魂の糧に飢えていた英文学科の若者は、

彼の一言一句を貪るように吸収した。本書を編んだ尾崎寛氏もその一人なのである。

詩人ハブル先生には、学術的業績はない。シェイクスピアからの引用でさえ、その全作品をそらんじるハブル先生にとつては、自分自身の言葉にほかならないので、出典をいちいち注記したりする必要などなかったのである。そんなハブル先生を、学者ではない」と疎んじる者が同僚の中にさえいた。詩人は学者よりも偉いということが彼らにはわからなかったのである。

天才を知る者は天才のみ。ハブル先生を同志社に招いた影の功労者は、畏友へのオマージュでもある名著「現代芸術のエポック・エロイク」パリのガートルード・スタイン」を書き上げて、1996年に他界した金関寿夫氏であった。亡きハブル先生の部屋を片付けているとき、英文学科が生んだ孤高の天才である金関氏が残したつぶやきがすべてを語り尽くしている。

「彼はほくらの良心だったな」

圓月勝博^{ねつきかつひろ}(大学文学部教授)



角川学芸出版
5,000円(税込)

うたの近代

短歌的発想と和歌的発想

安森敏隆^{やすもりとし}(女子大学名誉教授)著

題名を「うたの近代」短歌的発想と和歌的発想としたのは、私の大学時代の先生でもある白川静の「歌(うた)」とは「拍つ」「詠う」「字通」というところから近代短歌を根源のところから浮かび上がらせたいと思つたからである。そして、短歌の1300年余の伝統の中から、どこから「短歌の近代」が始まり、「和歌」と「短歌」を、何を持って区分けするかについて、根源的にかつ分析的に解析しておきたいと思つたからである。

この著書の中で、「写生と自然」「短歌的発想と和歌的発想」

「作品主体と編纂者主体」という三つの発想が一貫してあり、通底させている。

「写生と自然」については、斎藤茂吉や正岡子規は勿論のこと、殊に夏目漱石の「文学論」や「吾輩は猫である」や「坑夫」を通して書かれた「写生文」に注目して、漱石の「眼」の位置である視座を中心に解説している。「短歌的発想と和歌的発想」については、「短歌」と「和歌」の区別が現在においても曖昧な中で、「短歌的発想」と「和歌的発想」として区分けするところから論じられている。特にこの項については、同志社の創立者である新島襄の「和歌」と言われている作品を中心に新しい文学史的な分析をしている。また「作者」と「作品」の間に、「発話者」ともいうべき「編纂者主体」を指定して論じているのもこの著の特徴である。

著者より